

# ひょうたん島通信

大槌発! 第28回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



## プレハブ飼育実験室完成

中村乙水

大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター生物資源再生分野 特任研究員

国際沿岸海洋研究センターのある大槌町周辺の三陸海域は暖流と寒流の混ざる生産性の高い海域で、世界有数の豊かな漁場として知られています。沿岸に設置された定置網では、夏はサバ類やブリ、秋はサケ（シロザケ）など多くの魚が漁獲されます。夏にはクロマグロやメカジキ、マンボウなど大型の魚も獲れます。これまで、私は定置網で獲れるマンボウに小型記録計（データロガー）を装着して、マンボウの生態を研究してきました。マンボウを入手するためには漁師さんに頼んで定置網漁船に乗せてもらいます。その時よく言われるのが「マンボウよりもサケの研究をしてくれ」ということです。サケは定置網漁の売上の大部分を占める最も重要な魚種です。そもそも、定置網漁は海中に網を設置しておいて自ら入ってくる魚を獲る受動的な漁業です。漁獲量を増やすためには魚の生態を知ることが重要ですが、どんな時に網に入るのかはほとんどわかっていません。ある日は船に積みきれないほど魚が獲れたのに、次の日にはさっぱりいない場合もあります。魚の生態を理解する上で重要と考えられるのが水温との関係です。三陸



海域は、暖流と寒流が混ざるので複雑な水塊構造を形成し、水温も複雑に変化します。漁師さんも、水温が高いから中々サケが帰ってこないなど水温を指標に魚の来遊を予想しています。

魚に対する水温の影響を知るためには、水温コントロール下での飼育実験が必要になってきます。しかし、沿岸センターの新しい建物ができるのはまだまだ先のことです。そこで、仮の措置として今年3月にプレハブの飼育実験室が建てられました。解剖室と温度管理のできる水槽室を備えた充実したものです。8月には

調温装置付きの500リットルの円形水槽3基が加わりました。また、水槽内に流れを作り、魚の遊泳速度に応じた酸素消費量を測るための閉鎖循環式回転水槽、通称「スタミナトンネル」も完成しました。これらは、魚類の生態を専門に研究している青山教授、北川准教授が沿岸センターに着任したことで新たに導入された飼育実験設備です。この新しいプレハブ飼育実験室を使って魚に対する水温の影響を調べることができ、海での生態も同時に調べることができ、サケなどの魚の生態の理解もますます進むでしょう。

## 調査船「弥生のつばやき」

### 復興の思い重なる「大槌祭り」

何をお伝えすべきか。まずは、頼れる沿岸センターの船舶職員4人に相談したところ、「タラが不漁だぞ」、「台風17号でそれどころじゃねえ!」、「自分で考える」、ニヤツと笑うだけ。やはり、それぞれ海の男らしい答えです。試しに事務室の皆さんにも伺うと「そりゃ祭りでしょ」。ということで、今回は「大槌祭り」を紹介します。

9月20日に大槌稲荷神社、21日に小槌神社の例大祭が行われました。それぞれ



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早2年になろうとしています。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のぴーちゃんの後を受け、このコーナーも担当することになりました。

前日の宵宮祭では、鹿子踊、大神楽、虎舞などが奉納されます。秋の夜空を押し上げる勇壮な笛、鉦、太鼓の響きが、海上の私にまで伝わります。翌日は、ご神体に乗せた神輿が神楽や舞を従え、町内各所に設けられた「御旅所」を回ります。迎える人々は、両手を合わせて拝んだり、お清めの塩を奉じたり。居合わせた研究者も、思わず姿勢を正すほどの威厳に大きく心を打たれたようです。脈々と受け継がれた伝統に、鎮魂と復興への思いが

重なるからでしょう。

9月27日には、東北海洋生態系調査船「新青丸」の一般公開が行われました。船尾に刻まれた母港「大槌」への2度目の里帰りです。ひょうたん島をバックにクリーム色の船体が美しいコントラストを作り出していました。

沿岸センター周辺では盛土工事が進展し、新センターの移転先が見え始めました。今後、センター再建の様子を踏まえ、大槌の風をお届けしたいと考えています。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）